

---

# 魔法少女リリカルなのは ～光と雪の物語～

ラバーワンダ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～光と雪の物語～

### 【Nコード】

N4994T

### 【作者名】

ラバーワンダ

### 【あらすじ】

エースオブエース、高町なのは。そんな彼女には、心の支えとなっっている、小学校からの親友がいた……。

魔法少女リリカルなのはのオリキャラ介入版です。

基本的には原作に沿ってやっているつもりなのですが……ブレイク

する可能性が大です (^| ^ ; ) 。

……こんな作者をお許してください。

また、作者はあまり文章力がないので、できる限り努力はしますがどうか暖かい目で見てください。

感想、意見は遠慮なく書いてください。お待ちしております (^ ^ ) /

**第零話 出会い。そして、生まれる絆（前書き）**

これは、まだ彼女が一年生の時に起きた、思い出の物語である。

## 第零話 出会い。そして、生まれる絆

今から二年前

私、雪野<sup>ゆきの</sup> つららは北の方から此处、海鳴市に一人で引っ越してきました。

両親は引っ越しする一年前に謎の事故に巻き込まれて行方不明になつてしまいました、それからはずっと独りでした。

だから、この町に来て、どうせ独りぼっちなんだろうなあ、って正直思っていました。

でも、私の予想はことごとく外れる事となります。

引越しが完了した日、一人でテレビを見てみると、突然インターホンがなりました。

見ていたドラマがちょうど良いシーンだったので、タイミング悪いなあ……と思いつつも玄関に向かい、ドアを開けました。

つらら「はい……。」「目の前にいた人は髪が長く、少しパーマを当てている優しそうな女性でした。

優しそうな女性「こんにちは。向かいで喫茶店をやらせていただいております、高町 桃子と言つものです。どうぞよろしく願ひします。」

つらら「あ、はい……。」「

喫茶店というと……向かい側の喫茶『翠屋』さんの人ですか。この後、学校に転校手続きしに行くから、その時に少し寄ってみようかな……。

そんなことを考えていますと、

桃子「ほら。あなたも挨拶しなさい。」

と言って、桃子さんは自分の後ろに隠れてた女の子をまえに出した。おそらく、桃子さんの娘かな。

女の子はツインテールで、私と同じ年位の明るそうな子でした。

少女「あ、うん。えっと、初めまして。高町なのはと言います。よろしくね。」

つらら「あ、は、はい、よろしく願います。」

予想通り、明るい女の子でした。

それから、少し桃子さん世間話をした後、高町さん親子は帰っていききました。

その後、私はドアを閉めて、鍵を掛けました。そして、小さく、

つらら「あの子となら……友達になれるかな……。」

と言いながらリビングに戻って、今まで止めていたテレビを再生させました。

その後、私は少しテレビを見た後、新しく通う学校の手続きをしに行きました。新しく通う学校は、私立聖祥大附属小学校という所で、市内では、けっこうなお嬢様学校らしいです。

つらら（まあ、親戚の人からの援助金があるから、お金には困らないけど……うーん……不安だなあ。）

そう思いつつ、家への帰路を歩きながら、夕日を眺めていました。夕日は綺麗に輝いていて、そこにある公園を鮮やかな夕日色に染めていました。

つらら「……ん？」

ふと、私が公園の方を見ると、ブランコに一人の子供が座っていました。

よく見ると、その子の髪型は見覚えのあるポニーテールでした。

「あの子……もしかして……高町さん？」

そうなんです。ブランコに座っているポニーテール少女は、お昼に挨拶に来た高町さんの末っ子、高町なのはさんでした。挨拶に来たときの明るそうな面影はなく、暗い孤独感が大きく出ていました。

その姿を見た私は、どうしてもほっていくことが出来なかったのです。

つらら「高町……さん？」

高町さん「……………！」

私に気づいて私の方を向いた高町さん。

その目は、真っ赤になっていて、今まで泣いていたことを物語りました。

つらら「隣……いいですか？」

高町さん「え？あ……うん……。」

私の突然の申し付けに驚きながらも、暗い声で言いました。許可をもらい、隣のブランコに腰かける私。

年季がたっていたのか、キィイという鎖の音が響きました。

つらら「さっき泣いてましたけど……何かありました？」



高町さん「……………」

言いたくなかったのか、初めは黙っていたが、次第にぼつりぼつりと話始めた。

高町さん「実はね、私のお父さん……事故で入院しちゃったの。それでお母さんがお見舞いに行っているんだけど、その間はお兄ちゃんとお姉ちゃんが翠屋の店番をしているの。それで、私は家で独りぼつちでお留守番なの。初めは全然気にならなかったんだけど、だんだんと心細くなってきた、今じゃあもう……寂しくて。私、独りがこんなに辛いなんて思わなかった……。」

そこまで言うと、高町さんの目に再び涙が零れ落ち、

高町さん「もう、独りぼつちは嫌だよ……………」。

……泣いていた。

小さな身体を震わせて泣いていた。

その姿を見ると、何故か私まで悲しくなってきました。

高町さんは私と同じ孤独を……感じていたんだ。

でも……

つらら「独りじゃ……ないよ……。」

高町さん「……………！」

そう、私達は独りじゃない。

つらら「実は私も……独りぼっちだったのです。

両親は行方不明になっちゃって……兄弟姉妹も居なかったから、ずっと一人でした……。

でも……！」

そこまで言うと、私はブランコから降りて、高町さんと、面と向かい合った。

つらら「一人と一人が集まれば二人になります。

独りぼっちと独りぼっちが一緒にいれば、二人になって、『孤独』と言う文字が消えます。

だから……。

私と……友達になってください。」

そう言って、手を高町さんの方に差し出しました。

高町さん「……………え……………?」

高町さんのポカンとした表情に気付いた私は慌てて、両手を振って、

つらら「あ、いや、その、きゅ、急なことなので、あの、やっぱり、む、無茶があったりとか、その、しますよ」ううん、良いよ。「……………」

高町さん「ありがとう。そんなこと……………言ってくれて。すごく……………嬉しいよ。」

そう言うと高町さんは私の手を握って、笑顔で続けました。

高町さん「これからよろしくね。  
つららちゃん。」

つらら「は……はい！よろしく願います。高町さん。」

高町さん「そんな、高町さんって硬いよ。なのはで良いよ。」

つらら「じゃあ……なのはちゃん。」

なのはちゃん「うん」

そう笑顔で言ったなのはちゃんには……最初にあった暗さなどは欠片もありませんでした。

それから、私達の出来事から二年が経ちました。あれから、新たにアリサ・バニングスちゃんと月村すずかちゃんとも友達になって、楽しい一時を過ごしていました。

そして……私達の運命を変える、あの事件が待っていたのです……。

## 第零話 出会い。そして、生まれる絆（後書き）

はじめまして、ラバーワンダです。

いきなり、オリキャラが出てきて『こいつ……誰？』ってなった人。次回はオリキャラの紹介をしようと思っているので、ご安心を。

まだまだ若輩者ですが、精一杯頑張っていきますので、応援よろしくお願いします！！

作者とガイドランス（雪野つらら編）（前書き）

オリキャラ紹介です。

普通の文章ではつまらないと思ったので、会話式でやってみました。これからこういうのを、ちょこちょこ挟んでいきたいと思っています。

## 作者とガイドンス〜雪野つらら編〜

作者（以下、さ）：さあ、やってまいりました。  
作者とガイドンスもといオリキャラ紹介で〜〜〜す。

つらら（以下：つ）あの……大丈夫ですか？そのテンションで、最後までもちますか？

さ：大丈夫だ。問題ない。

ということを始めましょ〜う！！

つ：心配です……。

さ：さて、今回は第一回つということ、第二の主人公である雪野つららさんに来てもらいました〜！

つ：あ、は、はい、よろしく、お願いします……。

さ：おうおうおう、照れちゃって〜可愛い

つ：そんなに逝きたいのですか？（黒笑）

さ：……いや、ほんと、調子乗ってました。

まじ、すみません……。

さ：さて、改めて紹介していきましょう。

このガイドンスでは、今から作者がする質問に答えていって、そのキャラの特徴を知っていこう！！と言つことです。underst and?

つ：は……はい。

さ：それでは早速、自己紹介の方を……。

つ：あ、はい。ええと、雪野 つららです。

私立星祥大附属小学校三年生です。  
よろしく願います。

さ：つららは両親が、行方不明になってるんだよね。

つ：はい……。

さ：あつ、わ、悪い。辛いこと……思い出させたか？

つ：いえ。なので、私は……真実を知りたいのです。本当に……死  
んでしまったのか。

さ：……そうか。

さ：さて、次の質問にいきましょう……うー！

つ：切り替え……早いですね（苦笑）

さ：俺はね、暗い話が苦手なの。だから、さつさと進めたいわけ。

つ：あなたが触れたんじゃないですか……。



さ：学校って言ってたけど、得意教科とかあるの？

つ：うう、スルーしないで下さい……。

ええと、基本的に算数とか、計算していく教科が好きですね。逆に体育とか運動系は、苦手ですね。皆からは、凄いつて言われるんですけど……。

さ：……それって、苦手って言わないんじゃないか？

普通さ、出来ないから苦手なんじゃないの。

つ：そうですか？嫌だったら苦手なんじゃないのですか？

さ：なんか違うような気がするが……まあいいや。

……という事は、キャラ的には理数系？

つ：いえ、絵とかは結構好きですよ。皆からも、上手いって言われますし。

さ：要するに……オールマイティじゃねえか！！

ちくしょ~~~~~うらやましい~~~~!!

つ：き、急にどうしたんですか！？椅子を持って暴れはじめて……。

と、とりあえず、落ち着いてください！！

さ：どうせ、俺なんてなんも取り柄ねえんだよ！

一生地味みたいな生活を、送っていく運命なんだよ~~~~!

つ：お、落ち着いてくださ~~~~い!!

さ：ハア、ハア……。

さて、これでガイドンスを終了します!!

つ：え、もうですか!?

さ：いや、聞きたいことはだいたい聞けたからさ、もう良くね?

つ：……めんどくさくなってませんか?

さ：また、聞きたい事があれば、レビューや感想で聞いてください。

つ：作者のログインは不定期ですので、返事が遅れてしまう事があるかもしれませんが。

ご了承下さい。

さ：それでは、『魔法少女リリカルなのは 光と雪の物語』。ぜひ、楽しんでみてください。

つ：感想やレビュー等を書いてもらえると嬉しいです。

さ・つ：よろしくお願ひしま〜す!!

作者とガイドンス〜雪野つらら編〜（後書き）

ガイドンス終了後

さ：……流石に質問の量が少なかったかな……。

つ：い、今頃ですか!?

さ：ま、一応他にも聞きたいことがある人は感想やレビューで質問してって言ってるし、いつか。

つ：楽観的ですね……（苦笑）。

あ、ところで、魔力とかデバイスの説明は良かったのですか？

そのまま本編に行っちゃうと、分からない人が出てくるんじゃない？

さ：……あ。

つ：え？

さ：忘れてたあ~~~~~!!!!!!

つ：え~~~~~!?

さ：……一度、ちゃんとした文章で説明したほうが良いよね……

…（涙）。

つ：そ、そうですね……。

さ：少し分かりにくいと思いますが、後にちゃんとしたオリキャラ

紹介をします。

それまではどうか、私のクソみたいな本編でついてきて下さい……。

つ………こんな作者をお許しください……。

**オリキャラ紹介 雪野つらら（前書き）**

オリキャラ紹介です。

出来る限りのことは載せました。

## オリキャラ紹介 雪野つらら

雪野つらら(9)

私立聖祥大付属小学校3年

二年前になのはと出会い、親友になる。

容姿……黒のストレートロングに、瞳の色が黒いのが特徴。  
身長はなのはと大体同じくらい。

家族構成……両親は謎の事故に巻き込まれ、行方不明になっている。  
つらら自身、その真相を確かめたいと思っている。

性格……内気であまり表に立って意見をいうことはないが、仲間思  
いで仲間を傷つけられるのは許せない。  
怒るとSっぽい行動をするが、本人は自覚なし。

好きなもの……ヨーグルト

嫌いなもの……幽霊

好きな時……皆と遊んでいるとき。ドラマを見ているとき。

嫌いな時……皆が傷つけられたとき。

特技……料理(相当の腕前)

成績……理数系が得意。また、芸術や体育も高め。文系は少し苦手

だが、極端ではない。

魔力ランク…… A A A + (無印時)

レアスキル…… 魔力変換資質 (氷結)

実は、もう一つ能力が……。

デバイス名…… スノウティアーズ

オリキャラ紹介 雪野つらら（後書き）

ようやく載せられました。

長い間、私の駄文だけで付き合ってくれて、ありがとうございます。

また、情報は新しい事が発覚する度に更新させて頂きます。

それでは、『魔法少女リリカルなのは〜光と雪の物語〜』

本編スタートです！



## 第一話 始まりは突然に（前書き）

遂に無印編に入ります。

精一杯頑張りますので、応援宜しくお願いします。  
また、

「」……… 会話

『』……… 紙に書かれたこと・強調したいところ

（）……… 自分の考え

《》……… 念話

という風にかぎかつこを分けたいと思います。

それでは、どうぞ！

## 第一話 始まりは突然に

ピピピ、ピピピ。

目覚まし時計の音が、部屋中に響き渡る。

その音が鳴りはじめて五秒後にゴソゴソと布団が動き出す。

そして、布団から手が出てきて目覚まし時計のアラームを止める。

指している時間は午前7:00。

今日は平日なので、そろそろ起きて用意をしないとバスに遅れてしまう。

つらら「うう……眠い……昨日は変な夢を見たから……あまり寝れなかったですし……。」

と言いつつも、眠たい身体を無理矢理起こし、つららは布団から出てきた。

顔を洗って、服を着替え、学校に行く用意を済ませ、朝御飯の用意をする。

つらら「今日のご飯は……。うん、これにしよう。」

とって冷蔵庫から取り出したのは賞味期限が一週間程過ぎたヨーグルト一個。

腹は壊さないのか、と聞いてみたところ、

つらら「え、大丈夫じゃないんですか？冷蔵庫に入れてましたし。一週間過ぎた位では、お腹は壊しませんよ。」

と、笑顔で答えた。

因みに読者はどうかは知らんが、作者は賞味期限が1日でも過ぎると腹を壊してしまうのは、また別の話である。

ともかく、さつさと朝食を済ませ、家を出る。

向かう先は二年前に友達になって、今じゃ親友という仲になっている、なのはの家だ。

家の前に着くと、慣れた手つきでインターホンを押す。

初めは緊張していたが、さすがに二年が経つと、慣れるものだ。

桃子「はい」

しばらくすると、なのはの母親である桃子の声が聞こえてきた。

つらら「お早うございます。つららです。」

桃子「あら〜いつもごめんなさいね〜。なのは〜つららちゃんが来たわよ〜。」

なのは「はい。」

そして、またしばらくするとドアからなのはと桃子が出てきた。

桃子「いつもゴメンね。なのは、たまにはあなたからつららちゃんの家を誘いに行けるようにしなさいよ。」

なのは「も〜お母さん。最近それしか言っていないよ〜。」

つらら「大丈夫ですよ。あまり気にしていませんし。」

桃子「そう。いつもありがとね〜。って、こうして喋っていて良かったのかしら……。」

なのは「え?……あ〜〜!バスの時間に遅れちゃう!〜!つららちゃん。急いでいこ。」

つらら「あ、う、うん。」

桃子「気をつけて行ってらっしゃい。」

なのは「つらら」行ってきまーす!〜!

こうして、なのはとつららは登校していった。

7:30

桃子と喋っていて、時間がなくなったのでなのはとつららはバス停まで走っていった。

そのおかげで、何とかバスがもうすぐ発車するっていう瞬間に間に

合い、ギリギリで乗せてもらった。

つらら「ハア……ハア……お……お早うございます……。」

運転手「元気なのは良いことだけど、もう少し早く来た方が良いでしょう。そんなギリギリだと、いつか乗り遅れちゃうよ。」

なのは「す、すみません……ハア……ハア。」

全速力で走ったので、二人は息切れ状態だった。

???「なのは！つらら！」

バスに入り、乱れた息を整えていると、後ろの席から二人を呼ぶ声が聞こえた。

声がる方に行ってみると、金髪のロングの明るそうな女の子と、髪の毛が紫色のロングの大人しそうな女の子が、二人に向かって手を振っている。

彼女らは金髪の子がアリサ・バニングス、紫色の髪の子が月村すずかと言う名前の子で、なのはとつららの友達である。

なのは「おはよう。アリサちゃん、すずかちゃん。」

すずか「おはよう。なのはちゃん、つららちゃん。」

アリサ「なのはとつららは何時もギリギリだね。もう少し早く来れないの？」

つらら「い、ごめんなさい。

なのはちゃんが用意に時間がかかって……。」「

なのは「な、なのはのせいなの!？」

アリサ「また、なのはのせい? ったくも」。」「

すずか「なのはちゃんは少し時間にルーズだからね。」「

なのは「うっ! ……そ、それは言わないでよ」。」「

そんな平凡とした会話をしながら学校へと向かっていった。

そして、放課後 。

学校の終わった仲良し四人組は、塾へ向かうために歩いていった。

アリサ「つくづく今日も一日が終わった」。」「

なのは「終わった〜って……アリサちゃんずっと寝てただけじゃ……」。」「

アリサ「し……失礼ね! !」

ちゃんと、ノートもとってるわよ! !」

つらら「算数だけ……ですか？」

アリサ「う……。」「

すずか「ダメだよアリサちゃん。

ノートはちゃんと全教科書かないと。」「

アリサ「うるさいうるさい！！自分が解ってるから良いのよ！  
つと……言っている間に着いたわね。ここが塾への近道よ！」

そう言っつて、アリサが示した道は森の中にある小道だった。

つらら「え……？」「……この中に入りますか！？」

アリサ「そうよ！ここを通ると十分位速く塾に行けるのよ。」「

つらら「で、でも……」。

い、何時も通りの道で行きましょうよお……」。

つららが身体を震わせ、今にも泣きそうな声で言う。  
その言動は明らかに何かを怯えているように見えた。

アリサ「つらら、この道に何か嫌なものでもあるの？」「

つららの表情が気になったアリサは心配そうに尋ねた。

つらら「だって……森の中だと……幽霊が……出るって……。」

なのは・すすか「……え？」

つららが怯えていた理由。

それは『森の中だと幽霊が出る。』と言う概念に、とらわれていたからだ。

簡単に言うと、つららは幽霊が怖いのだ。

この結論に至った三人は脳の情報処理が出来ず、しばらくの間ポカンとしていたが、情報処理が完了すると……

なのは・アリサ「……くすっ」

なのはとアリサが笑い始めた。

なのは「ニヤハハハハ。

つららちゃん。森だったら何処でも幽霊が出る訳ではないんだよ。」

アリサ「そうよ！

それにしても、つららが幽霊が苦手だったとはね。……くくっ。」



「すずか「な、なのはちゃん、アリサちゃん。笑ってあげると可哀想だよ……くすつ。」

あまりにも笑いが止まらないアリサとなのはを注意するすずかだったが、すずかも笑いが堪えきれていなかった。

つらら「み、皆酷いです……。」

「皆は幽霊とか、怖くないのですか？」

そう尋ねるつららは少し涙目だった。

アリサ「アタシは幽霊とかそう言うのは信じないから。」

「なのは「なのはも……幽霊よりも、殺人鬼の方が怖いかな。」

つらら「げ……現実的ですね……。」

「すずか「私は幽霊は怖いけど……今は昼だからね。」

「こんなに明るかったら、幽霊も出てこないよ。」

つらら「うう……でも……。」

「なのは「大丈夫。いざとなれば、なのは達がつららちゃんのこと守ってあげるから。」

「アリサ「そうよ！幽霊なんて、アタシがやっつけてやるんだから！」

「すずか「だから、つららちゃん。安心して。」

「つらら」「うん……うん……。ありがとう。みんな……頑張ってみる。」

「皆が色々言ってくれて、少し励まされたつららは怖がりながらも、その道を通ることを決意した。」

「アリサ「そうと決まれば早速行くわよ。時間も無くなってきたし。」

「そう言っつて四人は森の中へ入っていった。」

「道は、思っていたよりも整理されていて、柵などもあった。」

「その為か、四人は困難なく進んでいった。」

「また、つららが不安にならないように、四人はずっと、喋りながら歩いていた。」

「すずか「森の中って……空気がとっても澄んでるね。」

「なのは「そうだね。……ところでつららちゃん、大丈夫？」

「つらら」「うん……まだ、不安ですけど……。」

「なのは「そっか。あ、そう言えば幽霊で思い出したんだけど……。」

「つらら」「なんですか？」

なのは「昨日、変な夢を見たの。」

つらら「変な……夢ですか？」

アリサ「へ〜どんな夢？」

なのは「えっとね……一人の男の子がお化けに襲われている夢。」

つらら「……………え？」

アリサ「アハハハ。なにそれ。なのは出てないじゃん。」

すずか「もしかして……それ、予知夢だったりするのかな？」

なのは「それはないよ〜。」

なのは、アリサ、すずかが三人で笑いあっていた時、つららはなのはの夢について考えていた。

つらら（そのお化けの夢、もしかして……でも、そんな事って……。）

すずか「ん？つららちゃん、どうしたの？」

アリサ「もしかして、幽霊でも見たの？」

つらら「あ、いえ……幽霊は見てません……。」

アリサ「じゃあ、何なのよ。」

つらら「えっと、なのはちゃんの夢について考えていたので。」

なのは「なのはの夢？……別に大したことじゃないと思うけど。」

つらら「いえ……あの、その夢の男の子、最後はお化けに負けて、飛ばされませんでしたか？」

なのは「え？うん、そうだけど……え、どうしてつららちゃんが知ってるの！？」

つらら「やっぱり……私も、昨日その夢を見たのです。」

なのは「え、そうなの！？凄い偶然だね。」

アリサ「そんな事って……あるものなのね。」

すずか「それで、どうなっちゃったの？」

その夢の続きが気になったのか、すずかが訪ねてきた。

つらら「えっと……最後は私達の方に助けを呼んでくるのです。」

なのは「そうだったね。確か……「助けて！」そうそうこんな感じに……って、え？」

つらら「！？」

その夢について話していると、突然助けを呼ぶ声が聞こえた。

つらら「……今のは……」

アリサ「さっきから急にどうしたの？つらら何かおかしいよ。」

つらら「さっき、助けを呼ぶ声が声が聞こえませんでしたか！？」  
「……ううん。」

アリサ「何も聞こえなかったけど。」

つらら「なのはちゃんは？」

なのは「……なのはは……聞こえた……。」

どろぢら「聞こえたのはなのはとつららだけのようだ。」

「……」  
「助けてー!!」

今度はさつきよりも、強く聞こえてきた。

つらら「なのはちゃんー!!」

なのは「うん、いっつ。多分、こっちー!!」

そう言うと、二人は柵を飛び越え、森の奥へと走っていった。

アリサ「ち、ちょっと、なのは、つらら！待ちなさいよ！」

このアリサの叫びは今の二人には届いてなかった……。

しばらく走っていると、やがて開けた場所が現れた。そして、そこに何か横たわっていた。

なのは・つらら「……！」

近づいて見ると……動物らしきものが倒れていた。

つらら「これは……フェレット？」

よく見ると、フェレットらしきものだった。そして、首には紅と白の宝玉をぶら下げていた。

アリサ「なのは！つらら！」

やがて、後から走ってきた二人が追い付いてきた。

アリサ「いったい何なのよ。なのはまで……。」

なのは「アリサちゃん!!この先に動物病院ない!？」

アリサ「え、えっと……たしか……。」

すずか「この先に榎原動物病院があったよ!」

アリサ「そう!そこよ、そこ!」

つらら「場所わかる!？」

すずか「うん、大丈夫。」

アリサ「案内するわ!着いてきて!」

こうして、四人はフェレットを連れて病院へと向かっていった。

これが、高町なのはと雪野つららが魔法の世界へと介入していく、最初の出会いであった……。

## 第一話 始まりは突然に（後書き）

森の中で出会ったフェレット。

そのフェレットは夢でみたフェレットとそっくりだったのだ。

困惑するつららとなのは。

だが、運命は待つてはくれなかった……。

さ……どつ？この次回予告。かっこよくない？

つ……………。

さ……え、無視！？

……………まあ、と言つことで始めました、後書きの「くす」！

つ……………。

さ……え、つららどつしたの？さっきからずっと黙ってるけど。

つ……………スウ。

さ……イラ（おきろやあああ！…

つ……わあああ！ごめんなさあああ！…



さ……ゴホン、と言うことで第一話、いかがでしたか。

つ……やっと更新できたんですね……。

さ……まあね。で、一話書いてみて変更することを発表します。

つ……何ですか？

さ……今まではどのキャラが喋っているか分かるようにセリフの前に名前を書いていたが……これからは頭文字だけにします！

つ……ええ！どうしてですか！？

さ……考えてみるよ。もし三人が同じセリフを言ったとき……

なのは・すずか・アリサ「魔法少女リリカルなのは。」

……やけに長くな？

つ……そ、そうですね……。

さ……だが、名前だけにすると……

な・ア・す「魔法少女リリカルなのは。」

まだましじゃんー!!

っ…確かにそうですね。

な…っとうとでいねからはっしつますー!

っ…いねはセリフの前に名前付けなくてもいいわっしつしつしつ  
ね……。

な…っとうとでいね、次回もよろしくー!

## 第二話 魔法との出会い（前書き）

ようやくの更新です。

待たせてしまい、申し訳ありません。

それでは、どうぞ！

## 第二話 魔法との出会い

榎原動物病院

そのこの院長が、先ほどつらら達が持ってきたフェレットを診察していた。

院「随分と酷い怪我ね……でも、一週間安静にしておけば大丈夫よ。」

つ「院長先生、ありがとうございます。」

な・ア・す「ありがとうございます!」

院「どういたしまして。」

つ「あの、院長先生。これはフェレットなのでしょうか。」

院「そうね……フェレットっぽいけど……何か違うよね……。」

まあ、いいわ。今日はもう遅いから、うちで安静にさせておくわ。また、明日引き取りに来てね。」

つ「あ、はい。」

ア「ち、ちよっと。ヤバイわよ。もうすぐ塾が始まっちゃっよ。」

な「へ?……ああ~~~~!!……どうしよう!!?もう時間がないよ!!」

ア「とりあえず、急ぐわよ！ほら、すぐかみつららも行くよ！」

す「う、うん！」

つ「それでは、院長先生。宜しくお願いします！」

院「はい。頑張つてね。」

そんな院長先生の言葉を背中に受けながら。つらら達は走っていった。

暫くして、何とか塾に間に合った四人は、後ろの席で授業を受けていた。

今の時間の授業は数学。

ほとんどの生徒が苦手とする教科なので、皆は真剣にノートを書いていた。つららも例外ではなく、黒板書かれた内容をノートに書いていると、

スッ

と隣に座っているのはからノートが渡されていた。  
なんだろうと思ってみると、

ア『あのフェレット、誰が飼つ？』

という、アリサの字で筆記上の議会が始まっていた。

ノートには既に何人かが書いていて、

す『私は猫を飼っているから、フェレットはちょっと……アリサちゃんはやんは？』

ア『アタシも犬飼ってるからね……なのははどう？』

な『なのはの所はお家が食べ物屋さんだから、動物は駄目なんだ。』

ア『あゝそっか〜。』

そっか！つららは？つららは一人暮らしだし。』

ここで、ノートは終わっており、次はつららだということを示していた。

つ（そっか……みんな大変なのですね……）。

確かに私のところだと大丈夫ですね。ちょうどペットが欲しかったですし……。）

と言いつつとで、つららは、

つ『大丈夫ですよ。ちょうどペット欲しいなって思っていましたので。』

」

と書いて、なのはの所に回そうとしたとき……。

先生「では、この難しい問題を先生と一緒に解いていきましょうか。  
それじゃあ 雪野さん。」

つ「へ？あ、はい！」

突然つららが当てられた。

勿論、フェレットの話をしていたので、問題どころか、授業を全く  
聞いてなかったのだ。当てられた問題のページを見つけようと慌て  
ていたつららに、

な「P43の問い五番だよ。」

と、横からなのはがページ教えてくれた。

つ「あ、ありがとう。えっと……これは……に、二分の一です！」

先生「……せ、正解です。」

先生が驚いた顔で言った。

塾の生徒全員が「おおー!。」という、感銘の声を言った。けれど……。

先生「……でも雪野さん、先生はこの問題を一緒に解こうって言ったのですが……。」

つ「え……?」

あ、す、すみません。」

教室は笑いに包まれた。

先生「次からはちゃんと先生の話を聞いてくださいな。」

つ「すみません。以後、気を付けます。」

つからはそう言って、席に座った。

な「お疲れさま。つららちゃん。」

つ「うう……。恥ずかしいです……。」

そう言いつららの顔は真っ赤になっていた。

な「それと、はいこれ。」



そういつてなのは先程のノートをつららに渡した。  
つららの書いた文字の後に、

ア『本当！？それじゃあつらら、宜しくね。』

と書かれていた。

こうして、フェレットはつららが預かることになった。

その夜、塾が終わったつららはなのは達と別れ、家へと帰っていた。  
そしてお風呂から上がり、自分の大好きなドラマを見ていた。二本  
ほど観たとき、時計を確認すると、時計は9：00を指していた。  
そろそろ、明日の宿題をしようと立ち上がったとき。

????「聞こえますか!？」

つ「!?!?……また……あの声……?？」

昼間聞いた声が再び聞こえてきた。  
周りを見ると、つららはリビングではなく、真っ黒い空間の中に  
いた。

謎の声が続けて何かをいう。

？「僕の声が聞こえる人。お願いです。僕に力を貸してください。」  
つ「え、ち、ちょっと待って下さい！」

しかし、つららの声は通らず、いつの間にか黒い空間は消え、自分の家のリビングに戻っていた。

つ「あれ？」

予想外の事に驚きながらも、すぐに状況を理解し、先程の出来事について考え始めた。

つ（お昼の時は、声の元に行ってみると、あのフェレットさんにたどり着いた。

ということはあるの？あの声はフェレットさんということになるのかな……？  
となりますと……もしかして！）

一つの結論に至ったつららは、鍵を持って急いで家を出た。

理由はただ一つ、フェレットを助けるために。

家を飛び出したつららが、しばらく暗い道を走っていると、前方に

見覚えのあるポニーテールを揺らしながら、走っている女の子を見つけた。

つ（もしかして……なのはちゃん？）

そう思ったつららは前方の人が本当になのはかどうか確認するために、走る速度を上げた。

ほぼ真後ろまで追いついたつららは、その少女がなのはであることを確認し、声をかけた。

つ「なのはちゃん!!」

な「その声……つららちゃん!？」

つららの声に気づいたなのはは走る速度を落とし、つららの隣に並んだ。

な「つららちゃんもあの声……聞こえたの？」

つ「はい!……というと……なのはちゃんも？」

な「うん!あの声って……。」

つ「おそらく、さっきのフェレットだと思います。」

な「じゃあ、急いで行って、そのフェレットを助けよう!」

つ「……はい！」  
そう言うと、二人は速度を上げ、急いであのフェレットがいる、動物病院へと向かっていった。

つ「何……これ……？」

な「何があつたの……？」

動物病院に着いたつらら達は、動物病院の変わりぶりに驚きを隠せなかった。  
庭は荒らされ、建物は所々崩れてしまい、まるで爆弾でも爆発したのでは、と思うほどの壊れぶりだった。

つ「とりあえず、フェレットさんを探しに行きましょう！」

な「あ……う、うん。」

いち早く現実に戻ったつららは横で呆然としていたなのはを現実に戻し、フェレットを探そうとしたとたん、

キイイイン

という音が二人の耳を襲った。

つ「うつ……。」な「な……何なの？」

あまりのうるささに目を閉じ、耳を塞ぎ、その場につずくまった二人。

その二人が次に目を開けたとき、世界が変わっていた。

星が見えていた夜空に何かが覆い被さったかのようなもやが広がり、夜とはいえそれなりにいた人も、神隠しにあったかのように、誰一人いなくなっていた。

つ「え……。」

な「何がどうなってるの……？」

再び呆然とする二人。

その時、草むらから何かが飛び出して来た。よく見ると、それはフェレットだった。

と、それと同時に黒い化物が先程フェレットが出てきた草むらに突撃した。

間一髪でかわしたフェレットは動物病院の庭に一つしかない大木に登った。それに気付いた化物は大木の方へ再び突撃した。ズドン、という音と共に化物は大木の幹にぶつかる。

余りに強い衝撃に大木は耐えきれず、根本から折れていく。大木の上に登っていたフェレットは大木と共に落ちていく。

それを見ていたつららとなのははすぐさまフェレットの所へと向かう。

なのはとつららに気付いたのか、フェレットは倒れてゆく大木を踏み台にして、なのはの方へ飛んでくる。

な「うわぁー！」

飛んできたフェレットをなのはは両手でしっかりと受け止めたが、衝撃に耐えきれず、しりもちをつく。

つ「なのはちゃん！大丈夫！？」

な「う、うん……なんとか。」

フェレット「来て……くれたの？」

つ「……へ？」

な「フェレットが……しゃ、喋った！」

この突然の出来事にフェレットが襲われていることを忘れて、驚愕していた。  
すると、

？「グオオオオオオオー！」

と言いつ叫び声と共に化物はつらら達の方を向いた。

つ「と、取りあえず、に、逃げましょう!!!」

な「う、うん!!!」

そう言つて、二人はフェレットを連れて動物病院を後にした。

な「なにになになに!?! いったい何が起こつてるの!?!」

フ「詳しく説明している時間はありません! お願いです。僕に力を貸してください! お礼は、必ずしますから!」

つ「お、お礼つて……そんなこと言われましても……」

その時、走っていたつらら達の近くの建物が壊れた。衝撃と共に土煙が舞う。

土煙が晴れたとき、そこに居たのは先程の化物だった。

な「も、もう追いついてきた……」

つ「と、とりあえず、隠れた方がいいんじゃないですか……?」

そう言つて、二人と一匹は建物の近くに隠れた。

化物は気付いていなかったのか辺りをさまようように動いている。

つ「……それで、先程の力を貸してほしいっていったい……。」

フ「これを。」

そうやって、フェレットは自分の首に掛けていた宝石の赤い方をなのはに渡した。

フ「これを持って、目を閉じて、心を澄ませてください。」

な「え、う、うん。」

何が何だか分かっていないのはだったが、フェレットの言うことには従った。

フ「管理者権限発動。新規使用者機能フルオープン。」

フェレットがそう言うと、足元にアニメでよく見るような魔法陣が現れた。

フ「繰り返して。」

風は空に、星は天に。」

な「か……風は空に、星は天に。」

フ「不屈の心は……。」

な「不屈の心は……。」



な・フ「この胸に！」

トクン……と宝石の鼓動が聞こえてきた感じがした。

な・フ「この手に魔法を！レイジングハート！セット、アップ！」

レ「スタンバイレディ。セットアップ。」

その瞬間、なのはが光に包まれた。

その一連を見ているしか出来なかったつらら、はあまりの眩しさに目を伏せる。

光がおさまり、つららが目を開けると、空中になのはが先程とは違う姿で立っていた。

服装は私服からなのはが通っている制服を基調とした白い服に変わっており、その手には赤い宝石が組み込まれた杖、レイジングハートを持っていた。

つ「……すごい……。」

フ「なんていう魔力の量だ……」

フェレットは別のことに驚いていたようだが、つららの耳には聞こえなかった。

なのはが地上へと静かに降りてきた。そして……

な「ふえっ！？え！？ど、どうなってるの！？これ！？」

……自分の姿に驚いていた。

その時、今までの一連を黙って見ていた化物が、なのはが脅威になると感じたのか、なのはが驚いている隙に突っ込んできた。

な「わあっ!!」

ビックリしたなのはは咄嗟にレイジングハートを前に出した。すると、杖の先から魔方陣が出てきて、化物の攻撃を防いだ。耐えきれなくなった化物は距離をおくかのように後ろにとんでいった。

な「す、すごい……。」

レ「魔法についての知識はありますか？」

な「全然、全くないです!」

レ「では、私が全てをお教えします。」

前を見ると、化物は体から触手のようなものを出していた。そして……その触手を伸ばしてきた。

レ「飛びます。」

レイジングハートがそう一言呟くと、なのはの靴から桜色の翼を出した。そうして、なのはの体は宙に浮いた。

つ「うわぁ!」

しかし、なのはが飛んだことにより、触手はつららの方に向かってきた。

何とかかわすと、先程隠れていたところまで戻っていった。

な「つららちゃん!大丈夫!?!」

そのことに気づいたなのはがつららに声をかける。

つ「だ、大丈夫です!」

な「よかった。危ないからそこに隠れていてね!」

つ「わ、わかりました!」

先程の場所についたつららはなのはの言葉に頷いた。そして、つららはフェレットの方に向いた。

フェレットの首にはまだ白い宝石がかかっていた。

つ「あ、あの！」

フ「はい？」

つ「その白い宝石も、なのはちゃんの物と同じような物ですか？」

フ「なのは？ああ、さっきの子のことか。

うん。そうだよ」

つ「私にも貸してください。私も、なのはちゃんと一緒に戦いたいのです。」

フ「そうしたいのはやまやまなのですけど……こつちの方は使用者を選ぶんです。だから、あなたでは無理だと思います。」

つ「やってみなければ分かりません。お願いします。一度だけ、試させて下さい。」

フ「で、でも……。」

つ「何もできずに、ただ見ているなんて出来ないんです！だから…

…」「つららちゃん！危ない！」「え？」

何とかなのはちゃんを助けるために自分も戦おうと、フェレットを説得していたつららだったが、突然なのはの声が聞こえた。

その時、つららとフェレットは化物の触手に当たって、吹き飛ばされた。

な「っらっちゃん…！」

なのはの声はっらっらに届くことはなかった。

## 第二話 魔法との出会い（後書き）

化物の攻撃に吹き飛ばされたつらら。

はたして、二人はこのピンチをどう切り抜けるのか!?

そして、つららのデバイスとは?

次回、『魔法少女リリカルなのは〜光と雪の物語〜』

第三話、『覚醒と戦い』

絶望は、いずれ希望へと変わる。

タイトルは予定です。予告なく、変更する場合があります。ご了承くださいm( \_ \_ )m。

さ（以後、ラ）：さあ、やって来ました。

後書きのコーナー！

今日も張り切っていきましょう！

つ：……ワンダさん。

ラ：なんだよ。やっと魔法が出てきたんだぜ。もっとテンションあげようぜ〜！

つ：どうして私はまだ魔法少女になっていないのですか!?

ラ：いや、あの……量が少なかったからさ。二つに分けた方が良くな

い？っとなつてさ。

大丈夫！次回では入れてやるから。

っ…本当ですか？お願いしますよ。

ラ…当たり前だろ。俺を誰だと思っでいやがる。

っ…作者（笑）。

ラ………（笑）っで……。

っ…それでは、これにて、失礼します。感想もどしどし送ってくださいな。待つてまゝです。

ラ…そうなんだよ、俺はどうせカスなんだよ。どうせ俺は……。

### 第三話 覚醒と戦い（前書き）

やっとの更新です。

約2ヶ月ぶりですね。

覚えてくれている人、いますかね……。



### 第三話 覚醒と戦い

つ「うう……ん……。」

つ「ちらが目を覚ますとそこはちららとなのはとの思い出の公園だった。

先程の場所からここまではそうとう距離があったはず。

つまり、ちららはそうとう飛ばされたわけだ。

つ「痛っ！…！」

つ「ちらは起き上がるうとすると思腹に激痛が走った。

ちららが激痛が走った脇腹を見ると……

つ「うう……あつ……。」

そこにあつたのは……先程の攻撃を受け、血で真っ赤に染まっているちららの脇腹だった。

それを見たたん、いままでなかった痛みが襲いかかってきた。

つ（もしかして……ここで……死ぬのかな……？）

つららはそんな事を考えていたが、『死ぬ』という単語が出てきたとたん、急に自分の身に起きていることが怖くなってきた。

つ（嫌だよ……まだ……死にたく……ないよ。）

つららの頭に今までの事が走馬灯のなつてよみがえってくる。

つ（なのはちゃん……ごめんね……なのはちゃんのこと……助けてあげたかったのに……。）

手足が冷たくなっていく……。

意識も少しずつ消えていく……。

つ「……ごめんね……ごめんね……。」

つららの命の火は……消えかけていた。

? 「助けたいですか？」

つ「……え……？」

突然響いた機械的な声が、つららの意識を呼び覚ます。  
今見れる範囲で周りを見ても、誰もいない。

？「こつちです。」

再びその声が聞こえた。

聞こえた所は……つららの手の中だった。

握っていた手を開くと、そこにあったのはフェレットの首に掛かっていた白い宝石だった。

おそらく、先程の衝撃でどさくさに紛れて引きちぎったのだろう。

宝「もう一度聞きます。助けたいですか？」

つ「……できるの……？」

宝「あなたと私が力をあわせれば、可能です。」

つ「……それじゃあ……」ただし。「へ？」

宝「一つだけ、聞かせてください。」

つ「……なん……ですか？」

正直に言えば、一刻も早く助けに行きたかった。  
けれども、その宝石の質問に答えることにした。

聞かないと……いけない気がした。

そう言っている間もつららの意識は再び消えていく。

宝「私の力は何の力ですか？」

つ「……え？」

宝「少し質問が難しかったですか？ならば訂正します。  
あなたは何のために力を使いますか？」

つ「……それは……友達を助けるため」  
宝「それは本当ですか？」  
……  
つ「……どういうこと？」

宝「偽りの感情は入りません。本当の答えを教えてください。世界を変えるためですか？憎い人を殺すためですか？力で頂点に立つためですか？」

つ「…………。」

宝「人は常に感情を偽っています。少年漫画のような理由は本当に思っていることではありません。さあ、あなたの本当の答えを教えてください。」

つ「……あの……。」

宝「何ですか？」

つ「どうしてそんなに……暗いのですか？」

宝「暗い……とは。」

つ「そんな理由でなければ……契約出来ないのですか？」

宝「いえ……ただ、私はあなたの本音を聞きたいのです。」

つ「何を言われても……私の答えは……変わりません。」

そう言って、つらは一度息を整える。

そして……はつきりと言った。

つ「友達を助きたい。大切な人を護れる力が欲しい。  
ただ……それだけです。」

しばしの沈黙が流れた。

先に声をあげたのは……白い宝石の方だった。

宝「嘘です……私の前のマスターは……そう言って私を利用した。  
私を破滅の道具として用いた。

だから……嘘です。」

つ「嘘では……ありません。」

宝「嘘だ！」

つ「嘘じゃない!!！」

つららの声が夜の公園に響いた。

つ「確かに信じていた人に裏切られた気持ちは分かります……。でも、いつまでもそうやって過去を引きずっていたら、何も始まりません！自分の手で、勇気を出して、新しい未来を切り開いていくしかないのです！」

再び沈黙が流れた。

それは、先程よりも長かった。

宝「……本当……ですか？」

つ「………？」

宝「その言葉……信じても……いいですか？」

つ「……はい……。」

宝「……分かりました。貴方に力を貸します。共に大切は人を護り、未来を切り開いていきましょう……マスター。」

つ「……はい。えっと……。」

宝「私の名前は……スノウティアーズです。」

つ「……うん。スノウティアーズ、セットアップ。」

ス「分かりました。スタンバイレディ、セットアップ。」

その言葉の直後、つららは光に包まれた。

その頃、なのはは空中で化物と対峙していた。しかし、余りにも強い敵に苦戦していた。

それに、なのははついさつき魔法少女になったばかりなので、攻撃の方法も分からず、防戦一方だった。

フ「基本的な攻撃は、念じれば出来るはずですから、反撃を！」

と、いつの間にかフェレットが叫んでいるが、

な「そんなこと言われても……急にはできないよ……。」

ということより、出来ずにいた。

化物の攻撃も始めは体当たりしかしてこなかったけど、今では体から出た触手を使った攻撃に変わっている。

今はレイジングハートが指示してくれて、避けたり防いだりしているものの、一瞬でも油断すると当たってしまう。

さらに、先程の攻撃で吹き飛ばされたつららの容態が気になり、戦いに集中出来ずにいた。

な（つららちゃん、大丈夫かな……相当飛ばされちゃったし……。  
なのはが守るって決めてたのに……。）

レ「マスター！後ろ！」

な「え！？」

つららへの心配が油断へと繋がった。

なのはが後ろを振り向くと、すぐ近くまで触手が迫ってきていた。

な（避けられない！）

そう思ったなのはは、目を瞑り、これから訪れるだろう痛みに備えていた。

一秒……。



一秒……………。

三秒……………。

いくら待っても痛みは来ない。

疑問に感じたなのは閉じた目を恐る恐る開いてみると、そこには

……

攻撃を防ぐための白い魔方陣を展開し……………。

雪の結晶が描かれた浴衣のようなバリアジャケットを着用し……………。

白い宝石が埋め込まれた杖状のデバイスを持った……………。

つららの姿があった。

な「つららちゃん……………」。

つ「お待たせしました。なのはちゃん。」

な「その恰好……………」。

つ「フェレットさんが持っていた、もう一つの宝玉と契約しました。これで私も、魔導師です。」

な「でも、どうやって……………」。

つ「詳しい話は後です。まずは、この化物を倒しましょう。」

な「あ、うん！」

そう言うと、なのは達は触手を弾き、距離をおく。

化物は何かを感じ取ったのか警戒しつつも動かない。

つ「さて、この化物はどうやって倒せば良いのでしょうか……？」

ス「正確には……『倒す』ではなく『封印する』ですけどね。」

つ「封印……するのですか？」

ス「はい。あれは生き物ではなく、思念体の暴走したものですから。」

な「でも……どうやって？」

レ「封印魔法を使うか大威力魔法を使えば封印出来ます。」

つ「封印魔法はまだ習っていませんから、必然的に簡単な大威力魔法による封印になりますね。」

な「なのは達にそんな力、あるのかなあ？」

ス「マスター達の魔力はとても高いですから、その辺りは大丈夫で

す。……来ます！」

今まで何もしてこなかったのに業を煮やしたか、化物はつらら達の方に触手を伸ばしてきた。

スノウティアースがそれを察知したので、難なく避ける。

つ「取りあえず、それでいきましょう！私が時間を稼ぎますので、なのはちゃんは隙を見て、封印してください！」

そう言うと、つららは化物の方へと向かっていった。

な「あ、うん！レイジングハート！」

レ「了解です。キャノンモード。」

キャノンモードの名の通り、レイジングハートは砲撃に適した形状に変化した。

なのはは新しく出てきたトリガーに手をかけ、静かに深呼吸をする。

レ「そうです。意識を集中させて……私に思いを伝える感じで。」

な「うん……。」

そうして、なのはは時を待った。  
つららが作ってくれる隙を……。

つ「……とは言っても……。」

一方、時間稼ぎをかってでたつららの方は……

ス「マスター、避けてたり守ってたりばかりじゃ勝てませんよ。」

つ「攻撃方法が分からないのにどうやって隙を作れって言うのですか……。」

ス「それもそうですね。」

つ「そんな能天気なこと言わないでください（涙目）。」

………という状況だった。

そんなつららに化物は容赦なく触手で襲いかかる。

つららは、先程のなのはと同じように反撃が出来ずにいた。

すると化物は、触手攻撃を止め体当たりをしてきた。

つららは再びシールドを展開する。

つ「くっ……。」

が、触手攻撃とは違い、攻撃が重く押されていた。

つ「……どうしよう……。このままじゃ……。」

ス「……マスター、右手を前に出してください。」

つ「え、あ、うん……。」「っ？」

つららが右手を前に出すと、白い魔力弾が現れた。

つ「わっ、すごい……。」

ス「シュート。」

スノウティアーズがそう言うと、白い魔力弾は化物の方へと向かい、直撃する。

化「グオオオオオオオオ！！」

化物が苦しみのあまり、悶える。

よく見ると、当たった所が凍っていた。

ス「よい魔力をお持ちですね。マスター。」

つ「……………」。

ス「マスター？」

つ「今の弾……………たくさん出せますか？」

ス「マスターが望むのならば可能です。」

つ「……………それでは。」

そう言うと、つららは目を閉じ、魔力を集中させる。

つららの足下に不可思議な丸い魔方阵が現れる。

それと同時に、つららの周りに先程の白い魔力弾が五個ほど現れる。

つ「シューッッ！」

つららが言うと、その魔力弾は化物の所へと飛んでいく。

化物は避けることは出来ず、全弾当たった。

そして、当たった所から凍っていき、遂に化物は動かなくなった。

つ「やった……………なのはちゃん！」

つららはなのはの方に呼びかける。

なのはも、砲撃を撃てる準備はできていた。



レ「ジュエルシード、No.18、20、21。封印完了。」

レイジングハートがそう宣言すると、なのはとつらは光に包まれた。

そして光が収まると、なのはとつらは元の服装に戻っていた。

二人の杖も二つの赤と白の宝玉に戻る。

更に、今まで覆ってあった結界らしきものも消え、元の世界に戻っていた。

な「これで、一件落着かな。」

つ「そうですね……ん？」

な「どうしたの？つららちゃん。」

つ「何か……聞こえませんか？」

な「何かって……。」

そう言ってなのはは耳を澄ませると遠くの方から、

ファン、ファン、ファン……

という音が聞こえてきた。



な「あ、ホントだ。何かサイレンらしき音が……へ？」

なのはとつららが周りを見渡すと、そこには廃墟と思わせるような壊れた風景が広がっていた。

恐らく、先程の闘いで壊れたのだろう……。

サイレンの音が大きくなってきた……。

それと同時に、遠くで赤いランプが見える……。

なのはとつららの体から大量の冷や汗が流れてきた。

つ「な、なのはちゃん。ここに、これって……（汗）。」

な「なのは達……ここにいと、凄くマズイような……（汗）。」

つ「間違いなく……逮捕……ですよね。」

な・つ「……………」

フ「え、なに？二人とも、どうかしたの？」

つ「と、取りあえず、肩に乗ってください。」

フ「あ、うん。」

フェレットはじららの肩に乗る。

な「それでは……。」

つ「えつと……。」

なのはとつららは大きく息を吸い込む。そして……、

な・つ「ごめんなさああああああい……!!」

一目散にその場から離れていった。

### 第三話 覚醒と戦い（後書き）

初めての出来事に四苦八苦しながらも、事を治めたなのはずら。

そこで、フェレットが今までの事情を説明することになった。

フェレットの目的とは……………？

次回、『第四話、理由と協力』

歯車は速度を上げて回り始めた……………。

ワ：さあ、始まりました。後書きのコーナー。ですが……………なにこれ？  
なんで俺、縛られてるの？

つ：心配しないでいいですよ。ちよつと、お話（拷問）するだけですから

ワ：今、はっきりと本音が聴こえたよ！！  
しかも、尋問じゃなくて拷問！？

……………や、ちよつと、やめて、まじで、ちよつ、

イヤアアアアアアアアアア！！！！

暫くして……………。

つ：全く……どうしてそんなに遅れたのですか？少し心配になってたのですよ。

ワ：いや、実はさ、五回ほどデータがとんじやって。何回も書いていたんだよ。

つ：データが消えたって……携帯壊れたのじゃないですか？

ワ：いや、充電切れ。

つ：……それって自業自得ですよね……。

ワ：……はい。きちんと反省しています。

ワ：さて、そんな暗いムードはなくして、明るくやりましょう。それでは早速……ついにつららが魔導師になりました！！

つ：ここまで随分長く感じました。

ワ：そして、つららのデバイスもスノウティアーズという名前に決定しました！

つ：なんか、厨二臭いです……。

ワ：細かいことは気にしない。……次回はつららの自己紹介でも、やりたいと思います。

つ：まともな自己紹介文にしてくださいよ。

ワ：勿論！泥船に乗ったつもりでいてくれ！

つ：不安です……物凄く不安です……。

ワ：それでは。

つ・ワ：次回も宜しくお願いします。

#### 第四話 理由と協力（前書き）

2ヶ月以上のスランプを越え、ようやく更新です。

これからはもう少し早く更新できるように努力します。

それでは、どうぞ！

#### 第四話 理由と協力

何とか警察が来る前に現場から離れられたなのは達は、小さな丘にあるベンチに腰かけていた。

な「ハア、ハア、ハア……こ、ここなら、人も居ないし大丈夫だよ  
ね……。」

つ「お、おそらく……ゲホッ、ゴホッ。」

フ「だ、大丈夫？二人とも……。」

暫くして、息を整え終えた二人の様子をみて、フェレットが口を開いた。

フ「助けていただき、本当にありがとうございます。ええと……。」

な「あ、まだ名前とか言っていなかったよね。先に自己紹介していいかな。」

フ「あ、うん。どうぞ……。」

な「じゃあ、なのは達からするね。高町なのはです。私立聖祥大付属小学校三年生です。よろしくね。……ほら、つららちゃんも。」  
つ「あ、はい！えと……その……ゆ、雪野つらら……です。えつと、よ、よろしく、お願いします……。」

フ「あ、うん。(人見知りの激しい子だな……)僕はユーノ・スクライア。スクライアは部族名だからユーノで良いよ。よろしくね。」

つ(部族名……と言うことは、名字のことかな……?)

な「それで、ここからが一番聞きたい所なんだけど……さっきの一体なんだったの?」

全員が自己紹介を終え、少し空気が和んだ所で、なのはが口を開いた。

ユ「えっと……さっきのはジュエルシードって呼ばれるロストロギアが暴走したものなんだよ。」

つ「ロスト……ロギア?」

ユ「時代や歴史の中で使い方を間違えれば、世界を壊してしまう物の事だよ。本来は、それを管理するものによって、厳重に保管されているんだ。」

つ「そんな物が……どうしてここに?」

ユ「……僕の……せいなんだ。」

すると、ユーノは顔を下に向けつつむき、か細い声で言った。

な・つ「……え?」



当然、その事を知らないのはとつらは戸惑いの声をあげる。

ユ「その時、僕は故郷で遺跡搜索の仕事をしていたんだ。ある時、古い遺跡でたまたま発見したのが……ジュエルシードなんだ。」

な「ジュエルシードを見つけたのは……ユーノ君だったんだ……。」

ユ「うん。それから、それを管理局に搬送途中に……運んでいた船が事故にあってしまつて……。」

その時に21個のジュエルシードが落ちた場所が……日本、海鳴市なんだ。」

な・つ「……………」

ユ「回収できたのは……あなたたちが手伝ってくれた3つだけ……。」

ここまで一気に喋つたユーノは一度息を整えるかのように深呼吸をした後、再び話し始めた。

ユ「手伝つて頂き、ありがとうございます。ですが、あなた達をこれ以上怖い思いをさせるためにはいきません。

なので、残りは僕が集めます。あなたたちは今日起きたことは全て忘れていままで通りの生活な……いやです」「……………えっ?」

夜の公園になのはとつららの声が響いた。

つ「理由まで聞いたのに、ほっておくなんて、そんなこと出来ません。」

な「そうだよ。それにお互い自己紹介をやりあったのだから、もう赤の他人なんかじゃないよ。なのは達はもう……友達だよ。」

つ「だから……友達が困っているのなら助けてあげたいんです。……うっん、助けさせて欲しいのです。」

ユ「……………でも……………」

それでもユーノは危険性を訴え、何度も断ろうとしたが、二人は頑としてうんとは言わなかった。  
そして、ユーノは説得を諦めて、

ユ「……………わかりました。それでは……………よろしくお願いします……………」

な「……………うん……」

つ「ありがとうございます……」

ユ「そんな。お礼を言うのはこちらのほうです。本当にありがとうございます。」

つ「い、いえっ!」

な「ねえ。そんなに固い話し方はやめようよ。普通にタメ口で良いよ。」

つ「はい……。私も、その方が緊張しなくてすみますし……。」

ユ「そ、そう……。分かりました、じゃないや……。わ、分かったよ。」

な「さて、それじゃあ戻ろっか。そろそろ帰らないと、家族の皆に怒られちゃう。」

つ「あの……。なのはちゃん、急いで帰らないと……。マズイよ。」

な「えっ?なんで?」

すると、つららはポケットから懐中時計を取り出し、

つ「只今の時刻は……。00:15です。」

今の時刻を告げた。

その時刻を聞いたとたん、なのはの顔がみるみる青ざめていく。

な「……。嘘……。」

つ「なのはちゃんの就寝時間ははたしか……。十時ですよね?さすがに皆心配してるのでは……。」

な「……。どっしり……。」

つ「ふえっ?」

すると、いままでは呆然とその場に突っ立っていたなのはが突然泣きじゃくりながら、つららの体に抱きついてきた。

な「どうしようおおおおお!!!!もし出かけていたのがばれたら、間違いない説教じゃ済まないよおおおおお!!」

つ「ふえええええ!!!!??な、なのはちゃん!?あ、あの、そのそんなに強く抱かれると、その、傷が……。」

な「なにかいいアイデアないかな……ああっ、一応出掛ける前に言っておくべきだったよおおおおお!!」

つ「お、落ち着いて!!と、取りあえず、このままですと、大変なこと……。」

つららが必死になのはを自分の体から離れさせようとする。  
が、その時……。

ブシュ!

という何かが吹き出た音と共に、つららの脇腹から赤い鮮血が飛び出した。

つ「あ、あわわわわ。きき、傷が……。」

な「うわわわわわ！！つ、つららちゃん！ただ、大丈夫！？」

ユ「あれは……。」

ス「はい、先程、化物に吹き飛ばされた時の傷です。なのはさんと合流する前に、応急措置として、傷口を凍らせたのですが……先程の衝撃で開いてしまったようです。」

ユ「ふーん。そうなんだ……じゃなくて！！な、なのは！！は、早く病院に！！」

な「う、うん！！つららちゃん、しっかりして！！」

つ「ああ……川の向こうに死んだお婆ちゃんが手招きしてます……。お婆ちゃん……。」

な「だ、だめええ！！その川は渡っちゃだめええええええ！！」

……こうして、魔法と出会ったの初めての夜が過ぎるのであった……。

#### 第四話 理由と協力（後書き）

ユーノとの出会いによって、少しずつ変わっていく日常。

そんな状態をよそに、なのは達は仲良し四人組と一緒にプールに行くことになった。

果たして、なのはとつらは何事もなく、プールに入ることはい出来るのか……。

次回、第五話『プールで大騒ぎ!?!』

今の時間を、忘れてはいけない……。

ワ：さて、久々にやってまいりました、後書きのコーナー。まずはお詫びからさせていただきます……。更新が極端に遅れてしまい、申し訳ありませんでした。理由につきましては、活動報告にて、ご覧ください……。

つ：今回はいつになく、真面目ですね……。

ワ：当たり前だろ。あんなに沢山のユーザーさんに迷惑をかけたんだから。

つ：大人になりましたね……。

ワ：俺、どついつ風に見られてたの！？これでも高校生だよ！？  
うわぁショック……しばらくは立ち直れそうにない……。

つ：す、すみません……。それでは！！

ワ・つ：次回も宜しくお願いします！

ワ：see you next time!

つ：返してください……先程の謝罪の言葉を返してください……。

## 第五話 プールで大騒ぎ！？ 前編（前書き）

この話はサウンドステージ1のお話です。

因みに二話の内容は遺憾ながら省略させて頂きます。

そして、今回は字文が読みづらいと思われませんが、ご了承を。

それでは、どうぞ！お楽しみあれ〜。



## 第五話 プールで大騒ぎ!? 前編

あれから傷が開き、倒れたつららをなのはが病院へと運んだ。

病院では、あらかじめスノウテイアーズがしてくれた応急措置のお陰で奇跡的にも致命傷にはならなかったが、安静にということ、一日だけ病院に泊めていただくことになった。

そして、なのはの方は夜遅くまで外にいたことと、つららに怪我を負わせたこと（なのはのせいとは言いづらいが……）家族全員から説教をうけていた。

なお、ユーノはさすがに病院に置いていくわけにはいかず、今日だけなのはの家で預かることになった。

そして、次の日……。

ア「……で、つららの腰痛はましになったの？」

つ「はい……心配かけてしまいましたすみません……。」

す「でも、治ったのならよかったね。」

つ「ありがとうございます……すずかちゃん。」

無事に退院することが出来たつららは登校中のバスの中でアリサとすずかにその事を伝えた。

しかし、魔法のことは伝えられないので、腰の怪我は腰痛と言つことにはしておいた。

ア「まあ、大丈夫ならいいけど……ところで、今日の用意はできてる?。」

つ「……今日の?今日学校で何かありました?。」

す「違うよ、つららちゃん。」

な「今日は学校が午前中授業だから、皆で先週バス停の付近に出来たプールに行くって言ってたじゃん。」

つ「……ふえっ?。」

ア「『ふえっ?』て……まさかつらら、忘れてはいないよねえ……。」

つ「も、もちろん覚えてましたよ……たぶん。」

ア「たぶんってなによおおお!。」

つららの言葉に怒ったアリサは席から立ち上がり、つららに襲いかかった。

つ「ごめんなさあ~~~~い!!。」

す、な「アリサちゃん、落ち着いてええええ!!。」

ア「ウガーーーー!!これが落ち着いていられるかあああ!!。」

この騒動はバスが学校に着くまでに続いた……。

学校が終わった後、つららは急いで家に帰り、プールに行く準備をしていた。

なのは達はあらかじめ学校に用意を持っていたらしく、直接プール場へと行っている。

つ「ええっと、何処にいったのかな……。」

そして、只今水着を探してタンスをガサゴソと漁っている途中だった。

それというのも、つららは家族でプールや海水浴場に行くことは滅多になく、水着を取り出す時がなかったので、探すのに一苦労かかるからであった。

やがて、タンスの奥から水着らしき感触を感じた。

つ「あ！ありました……。」

それを引っ張り出すつらら。やがて出てきたのは……学校指定の紺色のスクール水着だった。

つ「うう……これしかないのですか……。まあ、一応着れるサイズではありますし、それに……そう、脇腹！脇腹の傷を隠すには丁度いいですし！これで、いきましよう！」

始めは躊躇したつららだったが時間が無いというのがあり、無理矢

理自分の頭に理由を作り、それを鞆の中に入れる。

これで用意を全て終わらしたつららは、昼食としてヨーグルトを一つ食べ家を出ようとした瞬間、インターホンが鳴った。

つ「ん？こんなお昼時に誰だろう？なのはちゃんは先に行ってるって言ってたし……新聞の勧誘かな？」

そう思いつつ、ドアに向かう。そこに居たのは……

美由希「やつほ〜！つららちゃん。」

つ「み、美由希さん！？どうしてここに!？」

なのはの姉である、美由希だった。その肩にはユーノもいる。

美「なのはからメールで聞いたんだ。つららちゃんがプールの用意を忘れたから、一旦家に帰ってるって。」

つ「……恥ずかしながら。」

美「それでついでだし、つららちゃんと一緒に行こっかな〜って思ってた。」

つ「あれ？美由希さんもプールに行くのですか？」

美「あらら……完全に忘れちゃってるね……。今日は恭ちゃんがプールの監視人のバイトをしてるから、私もちよっかいかけにいくって言ってたじゃん。」

つ「あっ！！そうでした……。すみません……。あうう……。」

美「そ、そんなに落ち込まないで。早くしないと皆待ってるよ。」

つ「あ、はい！すぐに荷物を取ってきますー！」

そう言っつて、つららはリビングに置きっぱなしにしていた鞆を取り、美由希の元へと向かった。

やがて、つららと美由希はプール場へとたどりついた。先に着いていたのは達は既に水着に着替えてプールサイドで待っていた。そこには、すずかちゃんのメイドさんである、ノエルとファリンや高町家の長男の恭也の姿もあった。

ア「つらら、遅い！遊ぶ時間が無くなっちゃうじゃない！」

つ「ご、ごめんなさい！水着を探すのに時間がかかっちゃいました……。。」

な「まあまあアリサちゃん。まだ時間はあるんだし、そんなに怒らなくてもいいんじゃないの？」

ア「そ、それは……そう……だけど……。」

一方、高町家の長男と長女は……。

恭也「まさか、美由希が本当に来るとはな……。」

美「恭ちゃんをからかいに行くって言うてたでしょ。それに子供達の面倒も見なくちゃいけないし。」

恭「……ノエルさん達がいるから大丈夫だと思うが……。」

美「え〜！？でもお〜。」

恭「……まあ、俺は監視人の仕事があるから、あんまり側にいれな  
いからな……正直、助かる。」

美「でしょ〜。」

と言つふうな会話をしていた。

そして、それぞれの会話が終わった所で、

す「あ、つららちゃん。更衣室が向こうにあるから、着替えてきた  
ら良いよ。」

すずかが向こうにあるドアを指差しながら言った。

つ「そうですね。では早速着替えに行つてきます。」

恭「ああ、更衣室と言えば……つらら。」

つ「はい。どうかしましたか？」

恭「先日、更衣室で覗きがあつたり、水着や着替えが盗まれるていうことがあつたから、気を付けるんだよ。」

つ「ええっ！？そんなことがあつたのですか！？……うう、荷物は自分持つていた方が良いでしょう……？」

美「こら、恭ちゃん！なにつららちゃんを怖がらせてるのよ。つららちゃん、気にしなくていいよ。」

恭「いや、怖がらせるつもりはなかったんだが……美由希も気を付けていてくれ。」

美「それは了解。」

ノエル「それは私たちの方でも気を付けます。」

恭「お願いします。」

ア「そんなこと心配しててもなんだから、早く着替えに行きなさいよ。」

つ「そ、そうですね……それでは、今度こそ行つてきます。」

そう言つて、つららは更衣室の方へと向かつていった。

こうして、つららが着替え終わった所で改めて皆で集まり、相談する事になった。

ちなみに当然ながらつららの着てきた水着は全員が（特にアリサが大爆笑した。

そして、皆の笑いが一段落したところで、

ア「それじゃあ、早く遊ぼうよ！」

つ「……そうですね……。」

アリサが催促をかけた。ちなみにもってきた水着を（当たり前だが）大爆笑されたつららは、プールサイドの端で体育座りで負のオーラを出していた。

な「つ、つららちゃん。ゴメンね。」

さすがに心配になったのか、なのはが声をかける。

つ「いいですよ……。どうせ私は受け狙いのキャラですよ……。どうせ……。どうせ……。」

な「そ、そんなに拗ねないで〜（涙）。」

ファリン「でも遊ぶっていわれましても、遊ぶものはいっぱいあり



ますよ。」

高町家のなぐさめのおかげでつららの機嫌がなおった頃、ファリンが首をかしげて言う。

な「流れるプールにウォーターライダー……あ！あそこに温泉もあるよ。」

ア「ねえ、恭也さん。向こうにあるステージは何？」

突然、アリサが奥にあるステージを指差しながら尋ねる。そこでは、二人の女子高生が何かをやっている。

恭「ああ、あれ？あれは、アリサの言う通りお立ち台だよ。近くにある受付の人に言えば、あそこで歌うことが出来るんだよ。」

つ「歌う……のですか？」

恭「そ。これが意外と評判でな、こうして女子高生や子供がそこで歌っているんだ。」

つ「そうなのですか？何でなのでしょう……私だったら恥ずかしさのあまり死んでしまいます……。」

恭「人の感性は人それぞれなんだ。恥ずかしがる人もいれば、喜んでやるうとする人もいる。」

ア「よし。それじゃあ、誰かあそこで歌わない？主につららとか、

つららとか……。」

つ「全部つららになっていますが!?!っていつか、なんで私なんですか!?!?」

ア「そりゃあそうですね。プールのことを忘れてたんだから。」

つ「それは関係ないと思います〜(涙)。と言うよりも、あれは腰の怪我のことで頭が一杯でしたので……。」

す・ア「怪我っ!?!?」

つ「あ、い、いえ、何でもありません!」

な「と、ところで、な、なのはも、聞きたいな〜。つららちゃんの歌。」

つららの発言のボロをつちむやにするかのように、なのはが話を戻す。

つ「は、恥ずかしいですよ〜。」

ノ「でも、こつこつというのは普通は言い出しっぺがやるのが通だと……。そうですね……。アリサお嬢様。」

ア「……えっ?」

ノエルの言葉を聞いたとたん、アリサの顔が真っ青になる。アリサは予感していた。いや、最早確証になっていた。間違いなく、自分が歌わされると。

フ「アリサお嬢様の歌が聞きたい人ー。」

全「はい。」

ファリンが多数決をとると、満場一致で賛成。これにより、アリサに逃げ場は無くなった。

ア「い……いいわ！その代わり、ちゃんと見ておきなさいよ！」

アリサがこう発言すると、皆が口々に、

美「いいぞー！」

な「わあゝ。すごい楽しみ！」

す「ほんとだねー。」

恭「頑張れよ、アリサ。」

と言った風にはやしたてたりする。

そんななか、

つ「よかった……なんとか歌わずにすんだ……。」

とか、一人思っているつららだった。

そんなことを思っている間にアリサは受付を済ましていた。

幸い、先程の女子高生のあとに待っている人はいなかったため、アリサの順番はすぐに回ってきた。

歌が始まると、アリサは普段は絶対に聞けないアニメ声で歌い始めた。

その声はプールの人達の耳に届き、さながらそこで有名人がライブをしているかのような盛り上がりだった。

な「すごかったね！アリサちゃん！」

つ「歌、上手だったのですね！……意外です。」

ア「意外ってなによ！でも、まあこれぐらいは当然でしょ。さて、私も歌ったんだし次はつららが……。」

つ「後で……でいいですか？」

ア「しょうがないわね。それじゃあ、つららの歌は後にして、プールに入るっ！」

な・す・つ「おお〜〜！」

アリスの号令と共に、四人はプールへと飛び込んでいった……。

つ「っと、その前に準備運動をしないとだめですよ。ラジオ体操第一、イッチ、ニー、サン、シー、。」

……前言撤回、三人がプールに飛び込んでいった。

つ「私、一旦上がって体温めますね。」

な「了解。」

ア「私たちはもう少し遊んでおくれ。」

つ「はい！」

一時間程遊んだ辺りで少々疲れを感じたつらは一度上がることにした。大人たちは既に別の場所に行っている。

つらが皆の集合場所であった場所に戻ると、ノエルとファリンがやっておいたのかパラソルと椅子が二つ用意されていた。片方は空席だったが、もう片方にはユーノが寝ていた。

ユーノはつららの気配を感じるや、目を覚まし、体を持ち上げた。

ユ「あぁ、つららか。どうしたの？」

つ「少し休憩です。」

ユ「そっか。」

そして、つらは空いていた椅子に座った。  
その時に脇腹の傷の所に小さく痛みが走る。

つ「……痛っ！」

ユ「……脇腹、まだ痛むの？」

ユ「ノが心配そうな目でつららを見る。

つ「あ、はい……少しだけですけど。」

ユ「……本当にごめん。」

つ「ふえっ？」

ユ「僕のせいで……こんな傷まで負わせてしまって……。」

つ「……ユーノ君のせいじゃありませんよ。これは自分で負った傷です。ユーノ君が気にすることではありません。」

ユ「でも……。」

ツ「私は断言しますよ。この傷はユーノ君のせいではありません。」

ユーノがつららの方を向くと、そこには一切の曇りのない瞳をした、つららの笑顔があった。

ユ「……ありがとう。」

その姿をみたユーノは、自分の罪を笑って許してくれた少女に、心の底から感謝を言った。

ユ「あ、そうだ。つらら。」

ツ「はい？」

ユ「僕、ちょっとだけ外の様子を見てきていいかな？さっきから何か……嫌な予感がするんだ。」

ツ「それは……いいですけど……。もしかして……ジュエルシールドですか？」

ユ「可能性がないとは言いきれない……。何かあれば念話で言っよ。」

ツ「念、話っ？」

突然の見知らぬ単語に目が点になるつらら。

それを見て、ユーノは何かを思い出したかのような表情をする。

ユ「あ！そつだ！つららには、まだ念話のやり方を教えてなかった。

」

つ「どうやるのですか？」

ユ「簡単だよ。自分の言いたいことと伝えたいことを頭に思い浮かべながら、スノウティアーズに意識を集中させるとできるよ。そうすると……《こんな風に》。

つ「っ！！」

すると、ユーノと始めて出会った時と同じ声が出た。

ユ「やっpegらん。」

つ「えつと……スノウティアーズに意識を集中させて……《こんな感じですか？》

ユ「うん、そう！上手く出来てるよ。それじゃあ、もしもの時はそれで連絡するね。ちなみになのは今日の朝に教えたから、できるはずだよ。」



つ「分かりました。気を付けて下さいね。」

ユ「うん。」

そう言っつて、ユーノはピョンと椅子から降り、何処かへ行っつてしまつた。

残されたつららは眠かつたのもあり、椅子に座つてうとうととしていた……。

恭「……誰か、いますか……?」

そこは本来なら誰もいないはずのボイラー室。  
ずるっ……ずるっ……という音はその奥から聞こえている。

先程、美由希たちと別れ、見回りをしていた恭也はボイラー室から物音を聞いた。

それが気になり、持っていた鍵で扉を開ける。

恭「ここは、立ち入り禁止ですよ……。」

恭也が声をかけるが返事はない。

そして恭也が奥へと一、二歩歩いたときに……。

恭「……うわぁぁ!！」

恭也は『何か』に襲われた。

第五話 プールで大騒ぎ!? 前編(後書き)

プール場にジュエルシードの反応!?

急いで駆けつけたのはとつららが見たものは……。

そして、今回の敵は一筋縄ではいかず、厄介なことに……。

次回、第六話『プールで大騒ぎ!? 後編』

そしてまた、小さき事件が起こっていく……。

ワ：さあ、やって来ました。恒例の後書きのコーナー!

つ：……あの、一つ良いですか?

ワ：どつどつ?

つ：……何ですか……前編、後編って。

ワ：……思った以上に長かった。サウンドステージのくせに長かった。

つ：ワンダさんがまとめられなかっただけでしょう!?後、私のキヤラが壊れてきてません!?

ワ：大丈夫!修正できる範囲だ!……多分。

つ……ワンダさん……。

ワ：さて、こんな私ですが、なんと、オリジナルの小説に挑戦しています！

つ：それって、つまり……

ワ：二次創作ではない、全くのオリジナルです！！まだ、執筆中のため、時間はかかりますが、いずれ公開したいと思います！

つ：何故にそんなのを……

ワ：いやね、俺が小説書いてるのをリア友に言ったら……「それだったら、お前オリジナルの小説書いてみるよ。創造力なさ男が。」と言われて、ついカットなって

つ：要するに、成り行きですね……

ワ：ま、そんなとこ。

つ：……そんなので、この小説、大丈夫なのですか……？

ワ：死ぬのを覚悟で頑張ります○(、´(´。それでは！

ワ・つ：『魔法少女リリカルなのは』光と雪の物語』次回もお楽しみに！

第六話 プールで大騒ぎ！？ 後編（前書き）

ようやくの更新です。

今回は少し書き方を変更しました。

それでは、どうぞー！

## 第六話 プールで大騒ぎ!? 後編

な「じゃあ、なのはもう少し上がろっかな。」

つららが上がって30分後位になのはもプールから上がって、休憩しようとする。

ア「了解。あたしたちはどうする？上がる？」

す「私は、さっき美由希さんから水泳の勝負しよって言われたから、ちよっと思って行くね。」

ア「あ、それじゃあ、あたしも見に行こ！なのははどうする？」

な「なのははつららちゃんの様子を見てくるね。」

ア「んっ。了解。行こっ、すずか。」

す「うん。」

こうして、なのははアリス達と別れ、つららの元へと向かっていった。

なのはがつららを探していると、皆が集まっていた所に建てられた椅子に座っていた。

な「あ、居た。つららちゃん！」

しかし、なのはが呼びかけても返事がない。不思議に思ったなのはは、椅子に近づく。そこで答えが分かった。

つ「スウ……スウ……。」

つららは水着のまま、小さな寝息をたてて寝ていた。よっぽど、昨日のことで疲れが出たのだろう。

な「……ニヤハツ。そんな格好じゃ風邪惹いちゃうよ。」

つららを起こさぬように小声で呟いた後、そっと近づき、近くにあってブランケットを取り、つららに掛けてあげる。そして、自分も隣の席に座って、つららの様子を眺めていた。

な（それにしても、なんかつららちゃん、寝顔が可愛いんだよね……。それを見ると、心が安らいじゃう。なのはも寝よっかな……）

こうして、つららの寝顔につられ、なのはも夢の中へと……

ユ《なのは、つらら！すぐに来て！ジュエルシードが発動した！》

な「はにゃあつ！？」

つ「ふあつ！？」

……行けなかった。突然のユーノからの念話に驚き、自分でも理解できない奇声をあげる。

隣を見ると、つららも目をパチクリさせている。

な「……とりあえず……行こっか」

つ「……うん、でもその前に……」

つ《ユーノ君！何処にいるのですか！？》

始めは寝起きでぼーっとしていたつららもユーノと話するときには完全に復活し、現在の状況を確認する。

ユ《ボイラー室付近のプールサイド！でも……完全に結界が発動できなくて、何人かまだ取り残されてる！》



つ《そんなっ！！どっしょうじょう……》。

な《とりあえず……急いで行こっ！ユーノ君もそこで待っていて！》

つ《はいっ！》

ユ《わかった！》

こうして、なのはとつらは念話を切り、ユーノの元へと向かっていった。

す「きゃああっ！！やめてええ！！」

ア「っ！！この！離しなさい、化物！あっ！そこは、駄目っ！」

つ「あわわ……」

な「これは……ちょっと……」

つ「モザイク表現……入りますかね……」

な「な、何の話？」

なのはとつらがユーノに言われた場所に行くと、何人かの女性の水着を脱がそうとする水のスライム状の化物がいた。

ユーノはと言うと、その場所から少し離れた所で背を向けている。

まるで、その現場を見ないようにするかのよう」。

な「ユーノ君、これはいつたい……」

ユ「僕は見ていない、僕は見ていない、僕は見ていない……」

つ「ユ、ユーノ君!？」

……ユーノは半ば壊れていた。

な・つ「ユーノ君!！」

ユ「うわぁっ!ごめん!！」

なのはとつららが耳元で呼びかけると、ユーノは正気を取り戻した。

ユ「どうやら今回のジユエルシードは、女性の水着を脱がせたい、  
という誰かの強い願いに反応したみたい」

な「そ、そんなの男子の誰もが思ってることじゃ……」

つ「それは言っちゃ駄目えっ!……でも、もしかして……」

つららが思い浮かべていたのはつららが水着に着替える前に恭也に  
言われたこと。

『先日、更衣室に不審者が現れた』と言うこと。

つ「犯人は……あの捕まった不審者の人？女性の水着を手に入れた  
い、という願いが……」

つ「あわわ……」

な「つららちゃん、どうしたの？顔赤くして」

つ「ふ、ふえっ！？い、いえ！何でもありません！そ、それより、  
はは早く封印した方が、良いですよね！」

ユ「そ、そうだね！なのは、頼んでもいい？」

な「まっかせて！パツパと終わらせて……あれ？」

つ「どうしました？」

ユ「ノの言葉に笑顔で答え、嬉々の表情でレイジングハートを取り  
出して……なのはの表情と動きが固まった。

な「レイジングハートの起動呪文……なんだっけ」

ユ「えええっ！？」

つ「？起動呪文？」

な「どうしよ〜」

つ「……別になくてもいいんじゃないですか？」

ユ「いや、なかったら起動しないから」

つ「でも普通に……スノウティアーズ、セットアップ」

ス「stand by ready. set up」

とたんにつららの姿が光に包まれ、前回と同じ浴衣姿のバリアジャケットを纏い、杖となったスノウティアーズを手にしたつららがいた。

つ「ほら、出来ました」

そういつて、クルリと自分の体を回転させる。  
それとは逆に、ユーノは驚きで体が固まっている。

ユ「すごい……詠唱なしでセットアップするなんて……」

つ「きつと、なのはちゃんも出来ると思いますよ」

な「そうかな……」

ユ「いや、だからといって簡単に出来る訳じゃない、ほんとだ、できた！」僕の立場が一気になくなった！」

そこには、なのはも前回と同じバリアジャケットを纏い、杖を持っていた。

これにより、ユーノの立場が少し無くなった。

な「それでは改めて……ジュエルシード、封印！シリアルナンバー……あれっ？」

つ「どうしましたか？」

再びなのはが固まる。

な「……シリアルナンバー……わからない」

つ・ユ「ええっ!？」

さすがのつららもこれには驚いた。

な「えっと……とりあえず封印！」

レ「sealing」

シリアルナンバーがわからないからといって封印出来ない訳ではな

く、レイジングハートが言った言葉と共に、リボンらしきものが現れ、化物を捕まえる。

化物は断末魔と共に光に包まれ、消えていった。しかし、かんじんのジュエルシードは出てこなかった。

な「これで……終わりなのかな？」

つ「それにしては……ずいぶんとアツサリと終わりましたね……」

ユ「いや、まだジュエルシードの反応は消えてない。まだ……いる」

ユーノの言葉に少し脱力ムードが入っていたなのは達に再び緊張が走る。

ユ「……っ！！こっち！ついてきて……っ！？」

つ「ユーノ君！？」

ジュエルシードの気配を感じたユーノは先導しようとしたが……突然地面に倒れた。

つ「大丈夫ですか！？」

な「やっぱりユーノ君、まだ完全に回復出来てなかったんじゃ……」

ユ「だ、大丈夫。心配ないよ」

な・つ「……………」

ユーノが平気そうな顔で立ち上がってみせるが、誰が見ても強がりだというのは明白だった。

誰もが言葉を発しない沈黙の中、ふいにつららがユーノに手をさしのべた。

ユ「……………」

つ「肩」

ユ「えっ？」

つ「乗ってください。これからは私の肩はユーノ君の特等席です」

な「な、なのはのもだよ！」

ユ「でも……………」

つ「一人で無茶しないでください。辛かったらいつでも……………頼ってください」

な「それが……………仲間じゃないのかな」

ユ「……………ありがとう」

な「それじゃ、行」っ！」「

っ「うん！」

そして、なのは達はジュエルシードの反応がある場所へと向かっていった。

なのはとつららが反応の元へと行くと、先程の化物が分裂して散らばっていた。

っ「うわぁ……………」

な「これじゃ、きりがないよぉ」

ユ「収束魔法を使って一度集めてから封印しかない…………。よし、僕が収束魔法を使うか」「だめっ！！」「…………うっ」「

ユ「の意見はアッサリと切り捨てられた。

ユ「でも、つららもなのはも収束魔法を覚えてないでしょ？」

っ「うっ……………」



な「た、確かに……。でもユーノ君にやらせないよ」

つ「そ、そうですよ」

ユ「じゃ、誰がやるの?」

な「なのはかつらちゃんに簡単に教えて……」

ユ「時間がないよ!」

つ「スノウティアーズ、できる?」

ス「マスターが望めば可能です。魔法は人の思いを現実にするもの  
ですから」

ユ「無茶だ!そんな簡単にできる魔法ではない!何か別の方法で…  
…」

その時、化物がなのは達の存在に気づき、一斉に襲いかかる。

ユ「危ない!空に飛んで逃げて!」

な「残念、ユーノ君!空を飛ぶ方法はまだ教わってないよ!」

ユ「……あぁっ!!そう言えばそうだった!」

な「でも、大丈夫」

つ「きつと……できる……」

ユ「なのは？つらら？」

ユーノはなのは達が言っている事が分からず、困惑している。その間にも、化物はなのは達に迫ってきている。そして、もう少しで襲いかかる……その瞬間に化物の動きが止まった。

ユ「……………え？」

動きが止まった化物はユーノ達から離れ、一つに集められている。それはまさしく、ユーノが行おうとしていた収束魔法そのものだった。

ユーノが隣を見ると、なのはは桜色の、つららは水色の魔方陣を出していた。

ユ「まさか……二人が……この魔法を？」

つ「いえ、化物を集めたのはなのはちゃんです」

な「つららちゃんの魔法は……この後だよ！」

なのはがそう言うと、集まってウヨウヨしていた化物が、急に動かなくなった。まるで、氷にされたかのように。

つ「フリーズバインド……たった今付けた名前ですけど……上手くいったようですね」

ユ「スゴい……収束魔法にバインドまで出来るようになるなんて……」

な「魔法は人の思いを形にする力……」

つ「でしたら、私達が『やりたいっ!』と思った事が出来ても、可笑しくないと思います」

ユ「そんな理屈で……上級魔法をやったのけるなんて……」

な「さうで、つららちゃん!」

つ「はい!一気に封印しちゃいましょう!」

な「せーの!」

な・つ「ジュエルシード、封印!!シリアルナンバー2!」

レ・ス「sealing」

二つのデバイスの言葉と共に、先程と同じくりボンらしきものが化物の所へと絡まり、一網打尽にする。

一つ違う点は、今度はきちんとジュエルシードが出てきた事だ。

な「今度こそ……終わりかな……？」

ユ「ジュエルシードの反応は……うん！無いよ！どつやら、本当に  
終わりみたいだね。お疲れさま」

つ「ありがとう、ユーノ君」

な「あ……所でアリサちゃんとすずかちゃんは？」

ユ「こつちに行く前に気絶させ……じゃなくて、寝かしておいたか  
ら大丈夫だよ」

つ「良かった」

な「それじゃ、戻ろっか」

つ「そうですね」

ユ「うん！」

こつして、なのは達はアリサとすずかがいるところへと、戻ってい  
った。

ア・す「う、ううん……」

ノ「お目覚めですか？アリサお嬢様、すずかお嬢様」

フ「遊び疲れたのか、よく眠ってましたよ」

ア「……なんか、変な夢を見たんだけど」

す「私も……ところで、なのはちゃんとつららちゃんは？」

ノ「あちらに」

そういつて、前のプールを指差す。

そこには、浮き輪に乗りプカプカ浮かんでいるのはと、その近くで泳いでいるつららの姿があった。

ノ「お二人とも、アリサお嬢様達が目覚めるのを待っていらっしやるのですよ」

フ「はやく行ってあげて下さい」

ア「……よし！二人を退屈にさせた分、ここからはノンストップで遊ぶわよ！」

す「うん！」

そういつてお互い立ち上がり、一気にプールサイドまでダッシュする。

そして、なのは達がいるところに二人同時に飛び込んだ。

ア「それ〜!」

つ「ふえええっ!?!ア、アリサちゃん、びっくりさせないでください!」

ア「寝ちゃっててゴメンね。その分、今から楽しむわよ!」

つ「はい!」

な「もちろん!まだ時間はあるもん!」

ア「でも、その前につららにはあそこに立ってもらおうかな……」

つ「……………え?」

そういつてアリサが指差した所にあつたのは、先程アリサが歌つたお立ち台だった。

それを見たつららは顔をひきつかせる。

つ「あ、あの……………申し訳無いのですが、今回は棄権ということには……………」

ア「ならない!これは強制よ!さあっ、レッツゴー!」

つ「うう……………アリサちゃんって、どうしてこういつことは何時も覚えていたのでしょうか……………」

ア「何か言った?」

つ「い、いえ何でも!」

な「つららちゃん、頑張ってる」

つ「な、なのはちゃんも……ひどいよ……」

こうして、皆に押されながらお立ち台へと向かっていく。いつも間に受付を済ませていたのか、つららは流されるままにお立ち台へと立っていた。

周りを見れば歌を聞きに来た人達の波になのは達はいた。

つ「うう……下手でも、笑わないでくださいよ……」

つららが呟いた直後に曲は始まった。

そして、つららの歌はプール場全体に響き渡っていた。

つ「いろいろありましたけど、楽しかったですね」

ユ「うん。やっぱり賑やかなのは本当にいいね」

時刻は午後9時。

あれから、つららだけではもの足りず、アリサは結局全員をお立ち

台に立たせ、歌を歌わせた。

そして、それが一段落した後は、夕方までプール場で遊んだ後、それぞれの帰路についた。

ユーノは皆で話し合ったように、つららが預かることになった。

そして、今は就寝前。

つららは今日の事をユーノと話していた。

ユ「それにしてもつらら、とっても歌が上手だね。最後の方にはお客様のほとんどがお立ち台に注目してたし、隣でアリサも悔しかっただよ」

つ「あ、あれは……思い出させないでください……。うう……今思い出しただけでも恥ずかしい……」

ユ「あはは。ごめんごめん」

つ「そう言えば今日……ユーノ君、ジュエルシードを封印するとき、空に飛んで回避をって言ってましたよね」

ユ「うん」

つ「ということとは……私達もすることが出来るのですか？」

ユ「もちろん。少なくとも、今日使った魔法よりは難しくないよ。」

つ「教えてください!」

ユ「今日は駄目。たくさん魔力を使ったんだから、しっかり体を休



めないよ。これも、魔道師の基本だよ」

つ「うう……そうですね……。それじゃあお休みなさい、ユーノ君」

ユ「うん。お休み、つらら」

つららが電気を消すと、二人はよほど疲れていたのか直ぐに眠りについた。

その日、つららは夢を見た。

なのはと二人で空を飛ぶ夢を。

その夢が現実になる日は近いだろう……。。

第六話 プールで大騒ぎ!? 後編(後書き)

プール場の騒ぎから一週間後。

つららはなのは達と町にくりだした。

その道中にジュエルシードの反応があったが……。

次回、第七話『町に潜む危機』

失敗は、成長の調味料である……。

ワ：さあ、始めました、後書きのコーナー。

今回は書き方を変更した部分を言っておきましょう。

つ：具体的にどのあたりを……。

ワ：？会話文の最後の句読点を無くしました。

？簡単な英語は英字表示にさせてもらいました。

……まあ、そんなところですかね。

つ：これで、もっと読者が増えるといいですね。

ワ：これからも気付いた所はちょこちょこ変えていきますので、

意見お待ちしています！

つ…これからもよろしくお願いします！

年始特別番外編 小さな願い 前編（前書き）

あけましておめでとうございますー！！

今年もどうかラバーワンダを宜しくお願いします！

年始特別番外編 小さな願い 前編

今日は元旦。

新しい年になつてはじめての日。

この日、つららは仲良し四人組で初詣に来ていた。

な「いや〜寒いね〜」

す「ほんとだね〜」

ア「なんでこんなに寒いのに浴衣なんて着ないといけないのかしら……」

つ「そ、それが風習ですから……」

ちなみに、今日はみんな浴衣を着て、おめかしをして来ている。

つららは水色、なのははピンク、アリサはオレンジ、すずかは薄紫、といった感じでそれぞれのイメージカラーの浴衣を来ている。

ア「風習っていつても、どうせお父さんが着せたいから着せただけでしょ」

な「これ見せにいったときのお父さんの反応が怖かった……つい、

近くにあった竹刀でお父さんの頭を『全力で』叩いちゃったぐらい」

つ・す・ア（鬼だ、この人！）

な「あ、それと初詣が終わったら、ごちそうするからぜひ家に来て  
つて。」

つ「本当ですか？あ、でも、迷惑にならないでしょうか……」

な「にやはは、大丈夫だよ。家の家族がどうという性格か、つららち  
やんが一番よく知ってるでしょ？」

ア「それじゃあ、お言葉に甘えましょうか」

す「そうだね。お世話になります」

つ「皆が行くなら……はいっ、お邪魔させていただきます」

な「うんっ！」

ア「それじゃ、さっさと初詣を終わらせちゃいましょうか。レッツ  
ゴー！」

な・つ・す「ゴー！」

こうして、四人はこの町にゆうつある神社、海鳴神社へと向かっ  
ていった。

場所は変わって、海鳴神社。

一人の少女が本堂の前に立っていた。

まだ早い時間だったので、他の人は誰もいない。

その少女は手を組み、一心不乱にお祈りしている。

頬に涙を伝えながら……。

ア「どうしてこうなったのよ」

アリサが溜め息をつきながら呟く。

す「仕方ないよ。頼まれたことはきちんとやらないと」

すずかがお祓い棒を持ちながら言う。

な「でも、こういうのもたまには良いかも」

そういつて、なのはは前に並べられたお守りを見ながら言う。

つ」で、でも、これはちょっと恥ずかしいです……」

つからは裾をおさえ、顔を真っ赤にしながら言う。

ア「それよ。なんで私達……」

巫女の格好なんかしてるのよおおおお！…」

アリサの声が神社に響き渡る。

そう、アリサがいったとおり、今四人は巫女服を着て、お守りの整理という仕事をやっていた。

な「まあまあ、落ち着いて」

す「あそこまで頼まれたら流石に断るわけにはいかないよ」

つ「……まさか、土下座して、涙を流しながらすがりよってくるとは思いませんでしたよ……」

もちろん、こうなったのはきちんと理由があるわけである。



話は20分ほど前まで巻き戻る……。

あれから、少しはや歩きで行ったので、普段かかる時間よりも、早く着くことができた。

ア「着いた〜！」

つ「でも、誰も居ませんよ……？」

す「出た時間が早かったからね」

な「つまり、なのは達が一番乗り、ということ」

ア「そう言うことよ！さて、それじゃあさっさとお参りして……ってあれ？」

な「アリサちゃん、どうかした？」

ア「あれって……神主さんじゃない？」

つ「確かに……そうですね」

アリサが言った方を見ると、神主らしき男が携帯電話で誰かと会話している。

だが、その様子はどこが焦っている感じだった。

す「どうしたんだろう……」

な「ちょっと、様子見に行こっか」

四人は神主に気づかれないように、神主の近くに移動し、近くの草むらに身を隠す。

ここからだ、神主の電話の内容が聞こえた。

神主「ああ、君もか……うん、分かった。最近流行っているからね。身体を暖めて、お薬をよく飲むんだよ。……はい、ではお大事に」

そう言うと、神主は携帯電話をしまい、溜め息を吐いた。

神主「はあ……今日は元旦だから、たくさんの方が参拝に来るとい  
うのに、まさか巫女のほとんどが風邪をひくとは……困ったぞ」

つ「お困りのようですが……」

つららが小声で話しかける。

す「私たち、お手伝いした方がいいのかな……」

ア「そうしたいけど……私達はまだ、20歳になってないから、働

けないよ？それに、手伝わたら帰りが遅くなって、皆心配するですよ。だから、あの人には悪いけど素通りの方向で」

つ「でも……あれ、なのはちゃんは？」

つ「らが辺りを見渡すと自分の隣にいたはずなのはがいなくなっていた。」

す「あれ？いない……」

ア「何処に行ったのかしら……あっ！」

なのはがいないことに気付いた3人は急いで辺りを見渡す。

そして、アリサがもう一度神主の方に目を向けると……

な「神主さん、どうかしましたか？」

……そこになのははいた。

ア「あいつは何やっとなんじゃああああ……！！！！！！」

つ「ア、アリサちゃん、落ち着いて！若干キャラ崩壊してるよ……」

す「あ、アリサちゃん、つららちゃん！」

神主「君達はいったい……」

な「皆も来てくれたんだね」

つ・ア「……………あ」

いつの間にか3人は草むらから飛び出して、神主となのはの前に立っていた。

神主「ちょうどいい！君たちに頼みがある！」

つ「は、はい……………何でしょう」

ア「まあ、あらかた予想はついてるけどね……………」

神主「君たちに巫女をやってもらいたいんだ！」

ア「やっぱりね……………」

アリサは半ば呆れ気味に言う。

神主「実は、入ってくれるはずの人のほとんどが風邪をひいてしまつてね。今日は元旦だから、たくさんのお参拝客が来るのに、このままじゃ皆帰ってしまう。だから……………」

そういつと神主は手を地面につき、頭を地面に擦り付ける勢いで、土下座をしながら、

神主「頼む！君達の力を貸してほしい！」

懸命につらら達に頼んだ。

ア「そりゃ、頼まれたら出来る限り助けてあげたいけど……」

す「私達、まだ小学生だから……」

つ「確か、未成年は働いちゃいけませんよね……」

神主「それは心配なくていい。君たちには裏方の仕事をしてもらうから、ばれることはないよ。もしばれても、僕が何とかするから、どうか……」

ア「でも……」

つ「……やりましょう」

す「えっ？」

な「本当に!？」

ア「でも……ああ、もう！分かったわよ！私達もやるわよ！」

神主「ほんとかい！？ありがとう、恩に着るよ！」

そういつて、神主はつららの浴衣の裾を掴み、涙を流して喜ぶ。

つ「ふえええ！？あ、あの、えと、きゅ、急に、どうか……！」

ア「ちよつと！つららから離れなさいよ！」

神主「え？ああ！！すまない、つい夢中で！」

神主も思わずだったのか、自分がやっていたことに気づくと、すぐに手を離れた。

つ「い、いえ……はっつ」

ア「で、私達にどうしろと言っの？」

す「アリサちゃん、失礼だよ……」

アリサが敵対心むき出しで尋ねるのを、さすがが注意する。

神主「うん、それじゃあまずは本堂に来てくれないかな。そこで話

をしよう」

そう言われた四人は神主の先導の元、本堂へと向かっていった。

……で、本堂で巫女服に着替えられ、今こうして働いてるといって  
とである。

神主「いや、本当にありがとう！君達には感謝してるよ」

な「いえ、お気になさらず」

つ「それでは、私は本堂の周りの掃除をしてきますね」

神主「ああ、頼むよ」

そういつてつらはらちんは箒を持って顔を赤らめさせながら、本堂の前へと移動していった。

ア「あの二人は完全になれちゃってるね……」

す「つららちんはまだちょっと恥ずかしがってるけどね」

な「さあ、アリサちゃん、すずかちゃん。残りの仕事をやってしま  
おう」

す「お〜！」

ア「お、おお……（すずかの少し楽しんでるでしょ……）」

こうして、アリサ達はそれぞれの作業に戻っていった。

本堂の前に来たつららは、そのまま人通りの少ない裏側へとまわっていく。

本堂の裏は森が広がっており、そこに寂しく小さな祠がポツンと置いているだけだった。

本堂の裏に着いたとたん、つららは大きく息をはいた。

つ「ふあう……やっぱりこの衣装は恥ずかしいよう……。ここだと人通りも少ないからよかった……。」

そして、つららは今度は大きく息を吸い、自然の空気を肺一杯溜め込んだ。

つ「ふう〜。こうしていると、いろいろな事が嘘みたいに感じてしまいますね〜」

？「ふんっ。所詮そんなの、ただの現実逃避にすぎねえだろ」

つ「……えっ？」



突然の音が辺りに響き渡る。

つららが周りを見渡すが、もともとある木々に人影は見当たらない。

？「あーあ。だから、人間は嫌なんだよ。……あいつ以外はな」

つ「……どこですか？」

？「ほう、俺の声が聞こえるのか？こりゃ、また珍しい客だな」

つ「……出てきてください」

得体の知れない存在に自然と声が強くなる。

？「やれやれ、せっかちなお客さんだ。あんまりせっかちだと、彼氏ができないぞ」

つ「さっさと出てこいって言ってんだよ腑抜けが」

？「誰が腑抜けだこの野郎おおおー！」

つ「……あ」

小さな祠の上に小さな黒猫が現れた。

つ「猫……さん？」

猫「猫じゃねえ！俺には『クロ』っていう立派な名前があんだよ！」

つ「ふえっ！？ね、猫が、しゃ、喋りました！」

クロ「ったく……」

つ「で、でも、そ、それじゃあ……」

クロ「……ああ、そうだよ。俺は……」

つ「ジュエルシード!？」

クロ「ちげえよ!!っつーかジュエルシードって何だよ!？」

しかし、クロの声はつららには聞こえていないようで、つららはおもむろにスノウティアーズを取り出す。

つ「こんな所で……スノウティアーズ、セットアップ！」

クロ「いや、落ち着けええええええ!!」

クロがつららを落ち着かせるのに十分以上かかった……。

年始特別番外編 小さな願い 前編（後書き）

はい、ということ、初めて番外編を書かせていただきました。

今回の後書きのコーナーはラバーワンダー人でお送りします。

はい、早速ですが、皆が今感じている疑問に答えましょう。

……なんだ前編って。

いや、恥ずかしい話、実は一話完結にしようと思ってはいます  
が、あれよこれよと書いている内に4ページいっちゃいました……。

「やばい！このままだと普通に10行く！」という危険を感じたの  
で、ここで切らせていただきました。

そして、何より不安なのが、正月スペシャルのくせに年始から少し  
離れてしまうことです。

……やべえ。どうしよう（汗）。

……とにかく、全力で執筆するので、宜しく願いします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4994t/>

---

魔法少女リリカルなのは ~光と雪の物語~

2012年1月1日01時48分発行